
強さ

En

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

強さ

【Nコード】

N4091BA

【作者名】

En

【あらすじ】

退屈と

講演会と

女王の話

「暇ですね…」

「暇だね」

巨人の姉妹が言った。

姉はX、妹はYと言う。

二人には相対的に小さな友人がいるのだが、冬休みが終わったので学校に行くようになり、結果的に退屈な1日を過ごす事になる。外出はしない。

Xにとっては平日は人が少なくてつまらないし、Yにとっては人を傷つけるのが恐い、というのがその理由だ。

今週は翌日から三連休だからまだいいが、来週からは土日までずっとこうだから憂鬱になる。

「Yー。また学校壊してきてよ。壊すのも直すのも手伝うからさ」

「止めて…。せっかく忘れてたのに…」

Yはある勘違いから二人の友人の通う学校を半壊させた事がある。

冬休み中だったが怪我人はでた。

Yはその償いとして彼らを治療し、学校の修理を手伝った。

幸いにも彼女の働きで冬休み中に学校の修理は終わった。

Xは、修理は大変そうだけど学校壊すのは楽しそうだな、と思って
いた。

そして、今その『大変そうな事』もこの退屈な時間よりはマシだ、
と考えたのだ。

「やっぱり駄目？」

「駄目です…。お姉様も冬休みの前まで…働いてたらしいじゃない
ですか…」

「なかなか仕事も来ないし、辞めちゃった」

XはXで建物の取り壊しの仕事をしていたのだが、依頼に来た人は、
大抵は彼女の姿を見ただけで逃げ出し、それに怒って追いかけ回し

て捕まえて、酷く苛めてから帰す、なんて事を繰り返す内に仕事が出来なくなったのだ。

そして、冬休みからは友人がよく遊びに来るようになったのでその仕事も辞めてしまった。

「せめて形だけでも続けてれば良かった。こんなに退屈になるなんてね」

「これから…ずっとこうですか…？」

「…そうだね。テレビでも見る？」

「それくらいしか…やる事が無いですしね…」

二人はテレビをつけて、暫くそれを見ていた。

サングラスの男が司会者の番組の後はつまらない物ばかりだった。

「…暇だね」

「暇ですね…」

「Xー。来たぞー」

Xはその声で目を覚ました。

どうやら寝ていたらしい。

その友人はただの友人ではない。

彼女にとっての特別な人だ。

急いで玄関に向かう。

彼はXの姿を認めると笑顔で手を振った。

自然と笑顔がこぼれる。彼に向かって目の前まで走って、しゃがみ込んで、拾って抱き締める。

「公平ー！」

「うわ！何だよ！」

「退屈で死ぬかと思ったよう。もう大学なんか行かないでずっと僕の家についてよ」

「いや、無理だって！」

「うう…。なら僕も大学に行く…」

「お前は俺の大学なんか行く必要ないだろ。地球で一番強くて頭も良いんだから。それに大学行ってもお前が授業受けられる建物なんかないぜ」

「じゃあ講師として…」

「だから建物が無いって。大学生に青空教室させる気か？」

「う…。公平の癖に僕を論破するなんて…」

「と、言うより今日のお前が変なんだ。昨日の自分に言ったら鼻で笑われるぜ」

「だって退屈なんだもん…。明日からずっとこうなんて考えただけでゾッとするよ」

「あ！１日だけなら良いかもな」

「何が？」

「授業じゃなくて講演会をやるんだよ。春になったら少しくらい外にいても問題ないだろ」

「あー。なるほどね。ふーん。そっかあ」

その後Xは暫く何かを考えていた。

そして、自分の中で結論が出たらしい。

それからは何かを考える様子もなく公平を弄んだ。

「…って事があつたんだ」

「余計な事言いやがつて…」

「俺たちの所に来たらどうすんだ！」

公平は翌日、二人の友人に昨日のことを話した。

彼らもXやYの友人だ。

公平はその二人を宿める。

「まあまあ、落ち着けよ。それらしいのがあつたら逃げりゃいいのさ」

「後が恐いだろ…」

その一人の神田が答える。

もう一人の木之本もそれに続く。

「それに俺たちとはとかく、巻き込まれる奴らはどうなる」

「大丈夫だよ。会ってすぐに逃げたりしなきゃ、あいつは怒らない。その辺を教えてやればいい。それに、Xは誰かを殺したりはしないだろ？」

「まあ…そうだな…」

「何の前触れもなく来られるよりはマシか…」

結局二人とも納得してしまう。

だが、三人とも、あまりにXやYに慣れていたせいで認識が甘くなっている。

彼女たちについては口でいくらでも説明出来る。

だが、実際に初めて会ってみると、その説明による認識は丸ごと吹っ飛ぶ。

人間も生き物だ。

生き物が本能的に恐ろしいと感じる物は決まっている。

自分より『大きく』て『強い』物だ。

教授が来た。

何か楽しそうにしている。

彼はその理由は明かさずにいつもとは違う事を、マイクごしに言い出した。

『えー、理学部の諸君には関係ないが、文学部の者にはこれから講演会がある』

「本当に関係ないな」

「Xじゃないよな」

「あいつ俺たちが理学部って知ってるよな。わざわざ文学部なんて

選ばないだろ」

『講師の女性はなかなかの大物で…』

「女性で大物だってよ」

「Xなら確かに大物だわ。文字通り」

『かつて悪の組織にいたらしく…』

「もうこれXだよな」

『素晴らしい話にする為に、違う学部生徒にも参加して欲しいそうだ』

「被害者増やしてどうすんだ」

「俺たちはどうする？行かないよな？」

「行くわけねーだろ。なんでわざわざひどい目に逢わなきゃなんねーんだ」

「だよなー」

『そういう訳だからこの後の授業は中止にする。因みに会場は彼女が青空の下が一番気持ちいいと強く希望したので外で行う』

「授業中止！？正気か!？」

「…けどあいつのドツキリの為に教授もなんかやってたよな。ノリノリで」

「ウチの大学も大概だな」

こうして、彼らはこの後の講演会は恐らくXの暇つぶし大会になるだろう、と考えた。

そして、暫くはここに留まろうと考えた。

Xはすぐに来るだろうから、他の学生に警告は出来ない。

講演会に参加したら確実に三人とも実験台として弄ばれる。

ならば、他の参加者には悪いが安全地帯で傍観していた方が良く、これが彼らの結論だった。

「さて、多分あそこだよな」

公平たちのいる部屋の窓の向こうは広い空間があり、既に多くの学生が集まっている。

神田が何かに気付いたらしい。
上を指差した。

「おい、上見ろよ。あの浮かんでるのXだよな」
見ると確かに羽を出したXらしき存在がいる。

「本当だ。ハハツ、確定じゃん」

「つか、あそこに居るの学生だけじゃん」
公平が言う。

確かに、学生しかいない。

「おや？君たちは行かないのかい？」
後ろから声がした。

振り返ると冬休み前に公平たちを嵌めた教授と、その後ろに何人かの人がいた。

「酷い目に会つと分かつて行く馬鹿はいないでしょう」

「あー…そうだ。君たちは知ってるんだっけ」

「知ってる、って何だよ」

「学生を嵌めるんですか？」

「面白そうだからね。私たちはそういうのが大好きなんだよ」
教授はにこやかに言う。

他の人、恐らくは他の教授も窓際に来て楽しそうに外を見ている。

「じゃあ私はもう行くよ」

彼もそこに混ざった。

『この大学に入って本当に正解だったのか？』と改めて思った。

「そろそろか」

講演会の始まる時間だ。

「みんなー！どいてー！」

上から声がした。

学生は上を見上げる。

そして、その殆どが悲鳴を上げて逃げ出した。

「うん。まあそうだよな」

「気絶してるのもいるぜ」

「懐かしいな…俺もあんな感じだった」

Xが降り立つ。

足下を見て溜め息をつく。

正面を向いて、息を吸って、叫ぶ。

「早く戻って来て！でないとみんな踏み潰すよ！」

学生は無視して逃げる。

取り敢えず外に出るつもりだ。

だが、大学もグルなので抜かりは無い。

出入り口は完全に封鎖されていた。

再び声が響く。

「そろそろ探しに行くよ！見つけ次第、潰していくからね！」

学生は皆、震えながら戻っていく。

「ハハッ。戻って来なくていいのに」

「どーせやらないよな」

「まあこれは仕方ないだろ。あいつ等何にも知らないんだし」

学生が戻ってきた。

泣いてる者もいる。

Xは一度溜め息をついて、質問した。

「ねえ？何で逃げたの？」

「いや、恐いからだろ」

「だよな」

当然だが、公平たちはXが本当はそんなに怒ってない事も、彼女が

自分の質問の答えを分かっている事も知っている。
これは彼女がよくやる手だ。

と言っても最近公平たちにはしない。

彼女も公平たちがこれを恐がらなくなった事を知っているからだ。

「僕はただ講演に來ただけで何にもしてないのに」

「『まだ』、な」

「教授たちからポテチ貰ったから食いながら見ようぜ」

「おー！ありがとうございまーす！」

神田は教授たちに手を振って言う。

彼らもにこやかに手を振る。

「ねえ？何泣いてんの？泣きたいのは僕の方だよ？いきなり逃げられて悲しかったんだよ？」

「嘔吐け」

「あ。これ美味い」

「みんな謝ってるな。土下座してるのもいる」

「許してあげても良いけど、その代わり…」

「条件言わずに、手を伸ばしたか」

「おー、逃げる逃げる。まあ無駄だけど」

「だから何で逃げるの！？別に許して欲しくないならそれでいいよ！？そういう子は食べちゃうから」

「おっかねえな」

「どーせ出来ない癖に」

「みんな僕の手に乗った？じゃあ今から僕の家に行くからね？」

「あ、飛んでった」

「これ誘拐じゃね？」

「だからどうしたって話だけど…。ん？メールだ。…」

「公平？どうした？」

「…ちよつと見てくれ」

「ん？『全部聞こえてた。後で覚えてろ』？…ハッハハッ」

「全く…人を馬鹿にして…」

Xは既に自宅についていた。

空を飛ばば、公平たちの大学から家まで何てそれこそ一瞬で着く。手の中の小人が潰れないかどうか心配だった。

家に入る前に飛ぶ前に数えた人数だけいるか確認した。

飛んでる間も左手で守っていたし、右手に血は付いてないから大丈夫らしい。

小人をテーブルの上に置いて、自分は椅子に座りながらメールを作る。

公平に宛てた物だ。

『全部聞こえてた。後で覚えてろ』とだけ書いて携帯をしまう。

本当は公平たちと遊ぶのが楽しみなので笑いたくなるが、それだとテーブルの小人たちは怖がらない。

だから作業は不機嫌そうな顔でやった。

さて、彼らには後で仕返しをするとして、まずは彼らに『講演』をしなくては。

テーマは昨日の内に決めていた。

『強さ』についてだ。

目の前に巨人がいる。

それが不機嫌そうにやはり巨大な携帯をいじっている。

巨人がその表情のまま携帯をしまつてこちらを見る。

Xの行動の全てが学生たちを怯えさせる。

彼らはXを怒らせた、と思っているのだ。

その不機嫌が自分たちに向かって来たら死ぬかもしれない。

そう思うと自然と涙が零れる。

Xがまた溜め息を吐いた。

「場所を変えたただけだって。何で泣くの？話が出来ないんだけど？」
その『場所を変える』事すら恐ろしい理由があるのでと疑ってしまふ。

「仕方ない…。なんか遊びでもしようか。勝てた人は帰してあげる」
遊び…。

綱引きみたいに力を比べる物なら勝ち目は無い。

学生たちは、その類の遊びだろうと予期した。

逃がす気は無いのだ、と。

だが、Xの提案した遊びは、相対的に小さな彼らなら寧ろ有利な物だった。

この体格差なら力で勝てずとも隠れられる所は沢山あるのだから。

『かくれんぼをやるうか』と言う言葉は講演が始まって初めて彼らに希望を与えた。

Xは足下に小人たちを置いた。

「じゃあ、この部屋に隠れてね。一時間したら探しに来るから」

Xはそう言つと部屋を出て行く。

扉を閉じて、こっちの表情が見えなくなった瞬間に笑いそうになった。

テーブルの上で『かくれんぼをやるうか』と言ってから今まで耐えていたのだ。

彼らは勝てると思っている。

肝心の彼らの勝利条件も言つて無いのに。

そもそも全員を見つけられない筈が無いのに。

「お姉様…！」

Yが現れた。

怒っているみたいだ。

「どうしたの？」

「いくら何でも酷いです…。だって…」

XはYの口を塞ぐ。

ここでネタバレは困る。

「静かにして」

扉の向こうに届かないように気を付けて喋る。

「モガモガ…」

Yはまだ喋れない。

「もしそれを言ったら探しに行かないよ？みんなお腹が空いて死んじゃうかもね」

「モガ…」

Yはしょんぼりした表情になる。

もう大丈夫だろうと思い、手を放す。

「ちゃんと考えがあるからさ。ただ苛めてるんじゃないの」

「本当…ですか…？」

Yは悲しそうな顔で言う。

それを見て思いついた。

「ねえ、Yが探しに行つてよ？」

「え…？」

「僕は探しに行かないからさ。Yが見つけてあげないとみんな死んじゃうかも」

「…なら今から探しに行きます…！」

「駄目だよ。みんなまだ時間があると思ってるのに今から行ったらパニックになるよ？」

「う…」

「大丈夫だって。僕よりも優しいそうなYが行った方がみんな安心すると思うし」

そんな筈が無い。

一人の巨人が現れただけであれほど怯えたのだ。

優しいそうでもそうでなくても二人目の出現はそれだけで小人た

ちがパニックを起こすには十分だ。
Yだって本来ならそれが分かるだろうが、Xが自分なら大丈夫だと言った事や、学生たちを助けたいという気持ちのせいで気が付かなかったのだ。

「じゃあ…行きます…」

「うん。行つてらっしゃーい」

XはYに手を振って見送る。

Yが扉を開けた。

扉を見る事の出来る位置にいた学生は困惑した。

あれは誰だ。

Xじゃない。

別の巨人だ。

キヨロキヨロとあちこちを見渡す。

あれに見つかつたらその場で潰されるかもしれない。

恐ろしい。

小さく悲鳴が漏れた。

巨人の動きが止まる。

彼女はこちらを見ている。

こんなに早く分かる筈が無い。

それなのに、彼女は少しずつ近づいて来る。

今、小さな悲鳴が聞こえた。

Xの机の上からした。

そこには公平たちが登る為の梯子がある。
多分、いる。

Yはそれに近づく。

机の上の小物の影から人が叫びながら出て来た。

「あ…恐くないから…逃げないで…」

その小人に手を伸ばす。

潰さないように慎重に摘み上げる。

手のひらに乗せて、Xの下へ連れて行く。

「おかえりー。フツ君が一人目かー」

Xは言いながらYの手のひらにいた一人目を摘み上げる。

彼は震えていた。

可愛いと思った。

再びYは他の学生の隠れている部屋に戻る。

後は全員見つけるまでは戻らない。

「二人きりだね」

ヒツと小さな悲鳴がした。

意識しないと笑みがこぼれそうなくらいに、可愛いらしい存在だ。

テーブルに下ろしてあげる。

彼はその途端に走り出した。

Xから遠ざかっているから逃げているつもりなのだろう。

だが、所詮テーブルの上を走っているだけだ。

何も言わずに人差し指をのせる。

あまりに容易く倒れたから、微笑ましくて、それでも怒ったように言う。

「さっきから何度も言ってるけどさ、何で逃げるの？そもそもどこに逃げるつもりなの？君は今テーブルの上にいるんだよ？」

彼を摘み上げ、目の前に持つてくる。

「もしかして落ちたかった？ならそう言ってよ。もっと高い所から落としてあげるから」

彼は泣き出してしまった。

気にしない。

手のひらにのせ、開いた人差し指で押し付けてやる。

彼の泣き声が小さく聞こえた。

「多分…全員見つけました…」

Yから学生たちを受け取って、手のひらにのせる。

「お疲れ様。1、2、…、うん。みんな居るね。じゃあ悪いけどさっきの部屋に行ってくれる？」

「…はい…」

Yは渋々だが承諾した。

何か考えがある、というのを信じたのだ。

Yが別室に行った後、手のひらの上の学生たちをテーブルにのせて両腕を使って逃げられないように彼らの周りを囲む。

「みんな捕まっちゃったね。不思議だね。みんな小さいからどこにでも隠れられるのにな」

理由を知らない彼らには確かに不思議だろう。

だから、教えてあげた。

「あのね。僕やさっきのYは、みんなよりも視力も聴力もずつといんだよ。みんながどこに隠れても無駄なくらいにね。僕と力比べなんかしてもみんなのやる気が出ないからね。どう？僕たちは凄いでしょ？」

自分たちを捕らえている腕の主は笑顔で言った。

最初からこの能力の差を見せつける為の遊びだったのか。

では、その遊びが終わった後は、どうなるのだろう。

その圧倒的な能力を更に直接的にぶつけてくるのかもしれない。

絶望感が場を包む。

巨人が口を開いた。

「じゃあ、そろそろ講演会を始めるよー」

巨人の楽しそうな声がする。

やり過ぎたかもしれない。

Xは自分と自分の腕に囲まれた小人との差を教えるすぐに感じた。
なんだかみんな絶望的な顔をしている。

だけど今日の本来の目的は彼らを苛める事じゃない。
その後だ。

早く講演会を始めようと焦った。

「じゃあ、そろそろ講演会を始めるよー」

自分のせいで生じた状況だが、これから先もこのままで、話の内容も印象に残らないまま終わるのは困る。

だから、なるべく明るく言ったのだが、どうも逆効果だったらしい。
今まで泣いてたのは半分くらいだったが、四分の三に増えた。

仕方ないからこのまま始める。

「もう分かったと思うけど、僕はみんなよりもずっと強い。だから、
力でみんなを無理やり従わせる事も出来たし、今みたいな状況も作
れる」。でも、それはどこでも変わらないと思うんだ」

少しずつだが、こちらを見る学生が増えてきた。

「例えば、就職してから、自分よりも偉い人：例えば社長が、どう
しても自分には正しいと思えない事をしていたとして、みんなには
それを止められる？多分無理だよな？だって、相手は自分よりも強

いから」

本当にただ話が始まった。

今まで自分たちを苛めてきた巨人の言葉は、初めは恐ろしかったが、だんだんと落ち着いて話が聞けるようになっていく。

その話が基本的には正しい事を言っているのも理由だろうか。

「法律とかも、本当に強い相手には意味が無い。それくらいの人なら自分の手を汚す必要が無いからね。代わりの手足なんかいくらでもある。だけどみんなはそれを、さっきまでは何となくでしか分かって無かったと思う」

確かにそうかもしれない。

それ程に強い存在には会った事が無かったのだから。

だが、今日、その本当に強い存在が現れた。「そう。はつきり言つて僕を法律で縛る事なんて出来ないし、誰かが何か言つても力で黙らせる事が出来る。やろうと思えばこの政府でも自分の好きに動かせるし、銀行をお財布に出来るし、今の法律や貨幣システムを丸ごと崩壊させる事も出来る。僕は、本当に地球上で一番強いんだよ。みんなが負けちゃうのは仕方ない事だからね」

彼女の言葉には嘘も誇張も無いように聞こえる。

有り得ないスケールの話でも『Xなら』と思つてしまう。

「だけど、みんなは運が良い。だって、僕に会ったんだから」

誰もが『そんな事は無い』と思つた。

泣いている人もかなり少なくなった。

その泣いている人も話はちゃんと聞いてくれている。

そろそろまとめようか。

「だけど、みんなは運が良い。だって、僕に会ったんだから」
「やっぱりやり過ぎたみたいだ。」

みんな『そんな事はない』という顔をしている。

「いや、勘違いしないでね？『この辛い経験が』とか言わないから。これだけならただ嫌なだけだよな？」

良かった。

少し表情が変わった。

『じゃあ何だろう？』という顔が増えていく。

「さっきも言ったけど僕は地球上では一番強いよ。これからみんなの会う強い人が何も出来ないくらいにね。だから、これからそういう人が何か、みんなにはどうしても正しいと思えない事をしていた時、それで君たちの方が正しいと僕が思った時には僕が助けてあげる。ね？ラッキーでしょ？これからはみんなが正しいと思った事をやっていいんだよ。大丈夫。本当に正しい事なら僕が文句を言わないから。これで僕の話はお終い。みんな恐がらせてごめんね」

自然と叫び声が上がった。

無論今までとは違った物だ。

彼女は自分たちに力をくれた。

強い存在とも戦う勇気をくれた。

「…とこういう話をしたんだよ」

腕を使つて、公平たちをテーブルに押し付けながら言った。

散々酷い事を言った罰だ。

「分かる？僕は何も考えず、ただ苛めて帰した訳じゃないんだよ？」
Yにも聞こえるように言った。

「ごめんなさい…。ちゃんと信じていれば良かったです…。私も…
お話を向こうから聞いてました…。凄く良かったと思います…」
「フフ。ありがとう。ほら、三人とも反省した？もうあんな事は言
わないでね？話を聞いた人が感動して叫ぶような話をしたんだから
言いながら公平たちを解放した。
公平が口を開く。

「あの…こう言うのもあれだけどき、その話さ…」

「何？なんか変だった？次の発言によつては公平にはまたお仕置き
するよ？」

「あのさ…。お前の話つて要するに『他の誰に逆らっても良いけど
自分には逆らうな。まあどうせ無駄だけど』って事だよな。ちよつ
と悪趣味じゃない？」

「…ああ…本当だ…。いや、けどみんな気付いて無かったし…」
次に木之本が言う。

「多分気付いてるよ。悪趣味とは思って無いだけで。文学部の中に
Xの事を『女王様』なんて呼んでたのがいたぜ」

「嘘…」

神田がふと思いついたように言った。

「なんだ。ファルコの目的通りに世界征服してんじゃん」

「し…してない！結果的にこうなったの！」

「『女王様、靴をお舐めします』とかいうのが来るかもな」

「こ…来ないよ！」

その瞬間、呼び鈴が鳴った。

「!？」

終わり

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4091ba/>

強さ

2012年1月10日20時53分発行